
緋弾の MARIA

李厨夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾の MARIA

【Nコード】

N4079BA

【作者名】

李厨夢

【あらすじ】

増加する凶悪犯罪に対抗するため、武力を行使する探偵「武偵」の存在が当たり前の社会。武偵を育成する東京武偵高校に通う青年・遠山キンシは、普通の生活を求めている。しかしある日現れたエリート少女武偵・神崎・H・MARIAと出会ったことにより、彼女を取り巻く戦いの日々以身を投じていくことになる――

設定（必読）

緋弾のエリアに思いっきり合わせるわけではありません。あしからず

名前；遠山 キンシ

読み；とおやま きんし

ランク；Eランク

科；探偵科
インゲスタ

クラス；A

武器；父のくれたバタフライナイフとベレッタM92Fをフルオート、

三点バースト化—（違法改造）した通称「ベレッタ・キンジモデル」。
。デザートイーグル・50AE、
オープンフィンガーグロップ
OFG「オロチ」を追加で使用する。

備考；普段は—（武偵高生としては）平凡な男子高校生だが、性的に興奮すると普段の30倍まで能力が向上する「ヒステリアモード」の持ち主。未完成ながら歴代の遠山一族でも最高の潜在能力を秘めており、エリアを介してその素質の片鱗を示し始める。

名前；神埼・H・マリア

読み；かんざき・ホームズ・——

ランク；S

科；強襲科
アサルト

クラス；A

武器；2本の小太刀とコルト・ガバメント・クローン2丁—（ステ
ンレスモデルとスチールモデルが各1丁）

備考；ピンクのツインテールに小学生のような体型で、
カメラ赤紫色の瞳

を持つ人形のように愛らしい美少女。
アリアはツンデレであったが、少し柔らかくなっている様子。

名前；峰 理會

読み；みね りあ

ランク；A

科；探偵科
インクスタ

クラス；C

武器；2本のナイフとワルサーP99二丁。予備として、母親くれたのデリンジャーも所有している。

フリフリの改造制服は広げるとパラシュートにもなる。

備考；長い金髪をツーサイドアップに結った、ゆるい天然パーマが特徴の童顔の美少女。微量の色金を含む青い十字架（5歳の誕生日プレゼントとして母から受け取ったもの）を身に着けることで髪の毛を自在に操れる能力を持つ。

名前；星伽 雨雪

読み；ほとぎ あまゆき

ランク；S

科；超能力捜査研究科 （SSR）。

クラス；B

武器；日本刀「色金殺女」イロカナアヤメとM60（後者はキンシに近づく異性への撃退に使われる）。

剣術の流派は星伽候天流。鎖鎌も補助武器として巫女服の袖に隠している

備考；普段は頭のリボン（封じ布）で制限しているが、炎を使った術や鬼道術といった魔術の力はG17グレイードという高いレベルを誇る。
また、札を使った占いも出来る。

名前；宮本 女々

読み；みやもと めめ

ランク；S

科；情報科
インフォルマ

クラス；A

武器；武蔵拵一（二刀流）

ロムテクニカルFPK一（PSL）

備考；宮本武蔵の子孫。

戦うときはいつも西洋の鎧を身にまとう。

ジャンヌに借りた時に、しっくりきたらしく、愛用している。

ちなみに、制服時ではガーターベルトを付けている。

超能力を使う事が出来、属性は雷。

名前；佐々木 淡海

読み；ささき おうみ

ランク；

科；

クラス；

武器；刃長三尺三寸一（約1メートル）の野太刀

備考；秘剣「燕返し」

佐々木小次郎の子孫。

着物の様な服を纏って戦うのだが、スカートは短め。

名前；蕾姫

読み；レキ

ランク；S

科；狙撃科
スナイプ

クラス；C

武器：ドラグノフ狙撃銃 — (SVD) — と銃剣。

備考：ウルス族と呼ばれる少数民族出身で蒙古の帝王チンギス・ハ
ンこと源義経の末裔

体は細くショートカットの美少女。

一弾 危険な仕事

武偵はロクな事がない。

俺の父、遠山キンジ―（金次）も高校生時代は、この、武偵を育成する東京武偵高校、略して武偵高に入っていたらしい。

そんな俺は、父に憧れていた。俺も、父の様に、強くなりたい…と。

でも、父は反対した。

「絶対に行かない方がいい。後悔するぞ」

と、俺に忠告してきた。

けれど、俺は反対を押し切って入ったのだ。

そして、武偵高に入学して、只今二年生。

最初に言った通り、本当にロクな事がなかった。

それは、俺の遺伝子のせいでもあるのだが…。

俺、遠山キンシ―（金四）は、最初は強襲科^{アサルト}のSランクだったが、探偵科^{インクスタ}に転科し、一番下のEランクに下がった。

父の言った通りだ。俺は結局後悔したのだ。

”ピンポーン”

「？誰だ…？」

時計を見るが今は朝の七時。

ちよーどいい時間だったのか、違うのか。

俺は、少しよろめいた足取りで、玄関へ向かう。

扉を開けた先には、俺の幼なじみ星伽雨雪が凄く綺麗な気を付けてして立っていた。

「あ…あ！き、キンちゃん！！お、おはようございますう！！！！」

「あ、ああ。おはよう」

雨雪は、綺麗な黒髪のツインテイルを揺らして、深々とお辞儀をする。

が、いつまでも顔を上げない。

それどころか、凄いいもじもじしていた。

「あ、あの。やっと、合宿から帰ってこれたので…。その張り切り過ぎてお弁当作ったからキンちゃんに食べて欲しくて！」

「お、おう。大変だったろ、ありがとな」

「い、いえ！！私の方こそ！！！！ありがとうございますっ、キンちゃん！」

「なんでお前が感謝するんだよ！！！」

雨雪を寮に上がらせる。

父さんの頃は、男子女子と分かれていたが、今は合同である。

ただ、部屋は分かれているが。

俺のルームメイトは、雨雪、神埼・H・マリア、峰理會、宮本女々さんだ。

まだ部屋はあるが、もう女子三昧でこのありさまだ。

当分はルームメイト不要かもな。

「ふああ…。おはようキンシくん…」

「ああ、おはよう…って…。今日は遅起きだな、女々さん」

「Ja。ちよつと調べものしてたら起きれなかったわ…。インフォルマ情報科の

課題とかも色々ね」

「大変だな。言ってくれば手伝ったのに」

「それじゃあ、意味がないと言うか。言葉に仕様が無いのだが」

気にしないでくれたまえ、と女々さんは一言言って、リビングへ向かった。

皆の朝食は女々さんがつくってくれてるからな。

ああ、何故さん付けなのかというと、女々さんも、一年の頃は強襲科で、Sランクより上を行きそうなくらいだった。

しかも、宮元武蔵の子孫だ。マリア以上の二刀流使いで、マスタース教務科にも一目置かれていた。

しかし、或る日女々さんは強襲科での仕事アサルト中、パートナーの失態で女々さんは大けがを負った。

その恐怖から、強襲を行う事が怖くなってしまい、強襲科（アサ

ルト）を下りたと言う。

闘う事は出来るが、たまに身体が動かなくなるらしい。
危ない仕事の時にならないと良いがな…。

HS

俺と雨雪も、リビングへ入り、俺は雨雪のお弁当を食べる。

手際良く料理している女々さんは、さぞ眠たそうにしている。

「マリアと理會は？」

「んー？理會は昨日の夜からいなかったわね…。マリアは私が起きた時はまだ…」

小さく欠伸をして、朝食の支度を終わらす。相変わらずの速さだな。

「調べ物って、あの切り裂き魔の事か？」

タコさんウインナーをつまんだ女々さんは少し驚いた顔でこちらを見つめる。

そして、こくりと小さくうなずいた。

「調べによると、切り裂き魔は武偵殺しの一員がやっていると言ううわさも聞いているわ」

女々さんは紅茶をテーブルにおき、優雅に（見える）紅茶を一口飲む。

「武偵殺し？」

「ja. 武偵を狙って殺す犯罪者よ」

「？それって捕まったんじゃないのか？」

「武偵殺しはイ・ウーという組織の奴らがやっている事よ？イ・ウーは復活したってこの前マリアが言ってたでしょう？」

イ・ウーは、神崎・H・アリアって人が折っていた組織の事で、俺の父もアリアって人に協力していた。

つまり、イ・ウーは、ホームズ家の子孫であるマリアの敵でもある。

差から俺たちに女々さんも協力してくれていた。

と、雨雪はいつからカリビングの外へ出ていたらしく、俺の銃と、緋色のバタフライナイフ。そして、上着を持ってきた。

「はい、キンちゃん。ちゃんと、武装してね…?」

「…分かったよ」

って、おおい!!!

雨雪! お前下向き過ぎて下着が見えてんぞ!? しかも、黒って…。
っ、こういうのは禁止だ!

俺、遠山金四は、HSS―ヒステリア・サヴァン・シンドローム
という、性的に興奮すると普段の30倍まで能力が向上するモード
を持っている。

俺はこれを略して、ヒステリアモードと呼んでいる。

一年生の頃は、これで試験を受けた為Sランクだった。

しかも、この状態でマリアと闘ったことから、目を付けられてしまっただ。

しかもこのモード。俺はまだコントロールが効かないので、後で死にたくなるような言動をとってしまう。

つまりは、女性の心をくすぐるような言葉を掛けてしまうってことだ

ももまん!?

それにしても、マリアが中々起きてこないな。

マリアも何か調べものでもしていたのか?

「マリアも、遅起きなのかしら……。起こしてくるわね」

「ああ、有難う」

雨雪も、綺麗な黒髪のツインテイルをほどいて、結び直している様子だ。

ふう、と一息ついた。

が、

ガシャンッ!!

——ええ!?

「!?!」

いきなり、窓が割れるような大きな音がした。

そして、婿の方から声が聞こえて来た。

「ま、マリア!! 寝ぼけて発砲しないで! そして、目を覚ましてください!!!!」

女々さんが叫びながら、リビングに走って入ってきた。

「ま、マリア!？」

マリアは目をつぶりながら、銃口を俺に向けて来た。
寝ぼけているようだが、いま無茶苦茶危ねえ状態だぞ!

「ハッ! ももまん!？」

「何の夢だよ!!」

思わず突っ込んじまったが女々さんと声が見事にかぶったな。

「あ、あれ? キンシ? と…女々じゃない。何してるのよ」

「何してるのよ。じゃないわよ!! 銃口を下げなさいな!」

「にゃっ!？」

マリアは今頃気づいたのか、銃口を下げ、ロックを掛けた。

「もう、武偵にあるまじき行為よ。神埼・H・マリア」

「ご、ごめんなさい…」

マリアは、正座して女々さんにお説教されていた。

寝ぼけるとは、まだまだ子供だな。マリアも。

「あ、あの」

雨雪が小さく声を出して、小さく手を上げる。

「なんだ、雨雪?」

俺が問うと雨雪は、すこし肩を跳ねさせて、もじもじし出す。

「雨雪?」

「が、学校遅れちゃうよ!？」

「忘れてたっ!」

マジですか!?

危なかった…。

もう少して遅刻する所だったぜ。

俺は、少し息を切らしながら一時間目を受ける。

俺の隣は女々さんだが、いつもの事ながら、女々さんは机に伏せて眠っている。

女々さんは学校の授業はあてにならないらしく、授業中はねている。

だが、成績はとても優秀で、テストも百点。行かなくても、九十七点と九十九点の間をさまよっているくらいだ。

万が一に問題にあたっても、寝ていたはずなのに普通に答えられちゃうので、或る意味超人だな。

マリアは何故かぼーっとしている。

そして、だるい一時間目が終わった。

「女々さん、一時間目終わりましたよ」

「はいはい…。いつもありがとさんですね…」

女々さんは小さく欠伸をして、教室を出て行った。

「マリア、ぼーっとして、どこ見てるんだ」

「窓ガラス…。どうやって直そうかしら…」

「そんなの気にするな」

「そうもいかないわ。いつそ私が造って…」

「ああ、気持ちは分かったから。けど、心配しなくていい。ありがとうな」

俺がマリアの頭をなでると、マリアは赤面して俯く。

すると、女々さんが、「昼メロ?」と言いながらこちらへ来る。
「違えよ」

「わぁ、怖い。ちょっと先生からお呼び出し。おいでなさいな」
「呼び出し?」

なんだ? 俺なんか悪い事でもしたのか?

「あ、来ましたね遠山くん」

探偵科^{インケスタ}の教諭で、俺のクラスの担任、天津 ゆかり。

何故武偵高の教師になれたのか分からないほど、気が弱い。

「実は、二人に頼みごとがあつて…」

「? おれにも? なんですか」

「実は切り裂き魔の事なんだけど、キンシくん単位が足りてないから、ちょっとこの依頼受けてもらおうかと…」

「切り裂き魔の事件をですか! ?」

「だ、駄目かしら…? 危険な仕事だつて分かってるけど…。で、でも女々ちゃんも居るし、良いよね?」

「え、良いよね? って…」

切り裂き魔か…。

確かに単位が足りなくて困っているのは事実だし。だからといってこんな危険な任務を…。

「受けるわ」

「マジですか!?!」

「キンシくん? 男たるもの、度胸がなければ一人目の男になれないよ?」

女々さんは微妙に黒いオーラを漂わせながら、ニツコリと笑う。

超怖え!

「そんなの必要な…」

「有難う! 受けてくれるのね!?!」

「ええ!?! 俺はまだ良いと一言も…」

「じゃあ、コレ資料ね!」

と、先生は何枚かのプリントを俺に渡し（正確には押しつけて）、鼻歌を歌いながら会議室から出て行った。

「面白くなりそうね」

くすくすと笑いながら、女々さんも出て行く。

俺は余りの展開の速さに、暫く立てずにいた。

というか、切り裂き魔なのに、Eランクの俺が付いて行っているのか?

足手まといになりそうなもんだが…。

「キンシくん、授業始まるよ?」

女々さんは、少し開けた扉から、ひよっこりと顔だけ出した。

「ああ、今行く」

H S Sにだけはならないようにしないとな。

二弾 銀色の雷

<放課後>

「という訳で、任務に行ってくるわね」
女々さんはニツコリと笑う。

「雨雪ちゃん、発狂しないようにね」

「き、キンちゃん…。し、死なないでね！…！死なないで頑張っ
ね！…！」

言っている意味がイマイチ分からないな。

「大丈夫だから。じゃあ、行ってくる」

「行ってらっしゃいキンちゃん！…！」

「ピンチになったら呼びなさいよ」

マリアは、自分の携帯をぷらぷらと揺らす。

「ああ」

と、俺は深くうなずいた。

「えーと、出現時間は午後6時ごろ。殺し方は、くし刺しってところかな。出現場所はこの辺ね」

「いかにも出そうな暗さだな」

「お化けの事？」

「違う」

女々さんはクスクスと笑う。

にしても、女々さんは凄い輝いてるな。

眼の色は真紅だから凄い光って見えるし、月の光で銀色の髪がキラキラと輝いている。

しかも、この大人体型。

高校生以上に見えるぞ。

でも、この格好じゃあ、少し怪しまれるかもな。

西洋の鎧をきて、長めの刀と、短めの刀―脇差をもっているんだからな。

それに、俺も銃を持ってるし。

「それにしても、来ないな」

「こんな恰好で張ってちゃあね。明らかに妖しいと言うか、腕によつぽどの自信がある奴じゃないとわざわざ来ないと思うわよ」

また、可愛らしく女々さんは笑う。

でも、さっきから一時間以上は待って居る気がするのだが。

今日は来ないのか？

「うーん、場所を間違ったわけでもないし。場所かえちゃったのかな？」

「場所かえるか？」

「そうね、変えましょうか」

結局、場所を変えたものの今日は収穫を得なかった。

――なのに。

「武偵高の生徒が襲われた!？」

「あの道は私達がずっと目を光らせていたのに、何故!？」

「わ、私に聞かれてもっ」

「おいおい、先生が可哀そうだろ。」

しかし、流石の女々さんも、凄く動揺しているのか、滅茶苦茶先生に、どなっている。

「まあまあ、女々さん。また見張らないといけないわけですし、それに、武偵高の生徒が襲われただけで、死んだわけじゃない。そんなに感情が高ぶっていたら、捕まるものもつきませんよ?」

と、俺に言われた女々さんは、しょぼんと肩を落とし、「そうね」と椅子に座った。

「なんか、御免なさい。」

「にしても、本当にどうして武偵高の生徒が襲われてしまったのかしら?」

「俺たちの目をかいくぐって襲う、そうも出来ないぞ」

「嫌、其れが出来た瞬間があったわ。私の不覚ですね…」

「え?」

「そんな事出来る瞬間なんてあったか?」

「あそこを一時間くらい見張った後」

「あ!」

「そうだ、あそこを見はった後、敵が来ないと予測してあの場所から離れた。」

しかし、離れていたのは約十分。悲鳴も上げずに人を襲えるか?

「その襲われた生徒は、現場にどのようにはしていたんですか?」

「え? ええと。ボロボロの状態で倒れていて、後水浸しだったわ」

「…。やられた…」

「え?」

「キンシくん、今日もあそこを張りましょう。昨日と同じ時間に」

「わ、分かった」

女々さんは何か分かったのか？

俺、ほとんど役にたってねえじゃねえか。

ついてない

↓放課後。

昨日と同じ午後六時。同じ場所に張った。

女々さんは昨日よりも真剣な顔つきで、刀を構えていた。

しかし、昨日よりも暗い気がする。空も曇ってきて、なんだか嫌な空気だ。

「…。ひと雨きそうね」

と、空を見上げた。「ついてない」と小さくつぶやき、空をじっと見つめた。

「確かに、曇ってきたし、天候悪そうだな」

「空気もね。雨が降る匂いがしてきた」

「鼻利く方なのか？」

「まあまあ…かな。教務部マスターズみたいに、凄く利く訳じゃないですよ？」

「そんな聞かなくても分かる。そこまで凄かったら正直びっくりする」

「あ、でも香水とかの香りに敏感ですが」

「は？お前香水付けてんじやねえのか？」

お前からフローラルな香りがするぞ？これは香水じゃないのか？俺が不思議に思っていると、女々さんはくすりと笑った。

「髪の香りね。特別に調合したヘアシャンプーだから」

「特別？なんだ、お前の家もお金持なのか？」

「Ja。うん少なくともマリア並みには」

な、なんだと！？

ありえん！俺の周りには金持ちが多すぎてなき出しそうだぞ、俺。

しかし、一向に来ないな。
昨日、やらかしたばかりだから今日は来ないのか？

——くすつ、くすくす

「!」

少女の消え入るような笑い声が聞こえる。だが、姿は見えない。
その少女の笑い声が続く中

——ぽっ

くそ、雨まで降り出してきやがった。

雨は少女の声と混ざって、少しうるさい。声は、道に響いてるんじゃない。頭の中に響いているんだ。

これもきつと超能力ステルスのちからだろう。

『私の事が気になるご様子で？』

「君なんか気にしたくなかったわ。けど、キンシくんの単位にかかわるものですから……。覚悟して下さいね

佐々木

淡海！
」

危機!?

「佐々木だと!？」

女々さんが気にしていた、佐々木小次郎の子孫だ。

まさか、こいつが犯人なのか？

『あれ、私の事ご存じ？ヤダ、勝手に人の事調べるなんてH^{エッチ}な事するなんてね。やんなっちゃう』

といって、又小さく笑った。

女々三の顔が、真剣越した顔になり、一点だけを見つめている。

そこにいるのか？残念ながら、Eランク武偵の俺にはさっぱりだ。

「今までの犯行は、お前の仕業なのか」

『ええ、そうよ？ホント、どうして私にばかりこだわるかな？私が勝てないからって弱い者いじめとか？さいてー。マジありえないんですけど』

？

俺…にじゃないよな。

『あ、でもこの前のは私が勝ちで良いのかな？』

「何の話かしら」

…心なしか、女々さんの顔が青くなってきたぞ？しかも、手足――いや、身体全体が小刻みに震えている。

『あらら？本当に、名前の通り女々しい子ねー。遠山。女々がたまに起こす症状知ってる？』

「…身体が動かなくなるって言うやつか」

『そうそう。パートナーが失敗するようにわざと仕向けたのよ？』

「!？」

『そのあと、パートナーの子を操って、女々の事をボロボロにしておいたの!』

「てめえ…」

『あー、そこまでは聞いてなかったの？女々!今もそうなんですよ』

う？」

「やめて…」

女々さんは顔を更に真っ青にし、少しずつ後ずさる。

『遠山が裏切るかもしれないって、すっごく不安なんですよ？』

「煩い…」

『強い子のフリして本当は逃げ出したくてたまらないんですよ——！？』

「黙りなさい！！！！！！」

——バツ

女々さんは、二刀を構えて、地面をけった。

そして、降り下げた

——ガキンッ！

女々さんの刀を、何かがガードした。その何かがだんだんと姿をあらわにしていく。

そして、其れは人。

ポニーテイルをゆらり、と揺らして、不敵な笑みを浮かべた。

「あはははッ！さあ、どんどん来いよ！遊んでやるからさア！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4079ba/>

緋弾のマリア

2012年1月12日20時56分発行